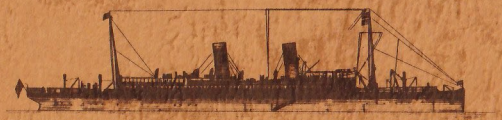


丸洋翔

S.S. SYOYO MARU

乘船御案内

ごあいさつ

このたびは、翔洋丸に御乗船いただき、誠にありがとうございます。

翔洋丸は、明治四十一年、亜細亜汽船が太平洋の表玄関といわれる桑港航路の就航船として建造した、海国日本を象徴する豪華客船であります。その優美な外観と高雅な内装設備、快捷な速力、丁重な待遇は好評を博し、欧米諸国の客船に伍してその姿を世界に誇り、今日に至って居ります。

昼間は広々とした遊歩甲板で広大な海景を眺め、夜間はピアノの音に耳を傾け、月光に乱れる太平洋を見つめながら楽しい語らいに時を過ごす――〝洋上の女王〟翔洋丸にて、この夢見るような異郷の贅を心ゆくまでお楽しみください。

亜細亜汽船会社

翔洋丸船長　鷹取重四郎

ごあいさつ

このたびは、翔洋丸に御乗船いただき、誠にありがとうございます。

翔洋丸は、明治四十一年、亜細亜汽船が太平洋の表玄関といわれる桑港航路の就航船として建造した、海国日本を象徴する豪華客船であります。その優美な外観と高雅な内装設備、快捷な速力、丁重な待遇は好評を博し、欧米諸国の客船に伍してその姿を世界に誇り、今日に至って居ります。

昼間は広々とした遊歩甲板で広大な海景を眺め、夜間はピアノの音に耳を傾け、月光に乱れる太平洋を見つめながら楽しい語らいに時を過ごす――〝洋上の女王〟翔洋丸にて、この夢見るような異郷の贅を心ゆくまでお楽しみください。

亜細亜汽船会社
翔洋丸船長　鷹取重四郎

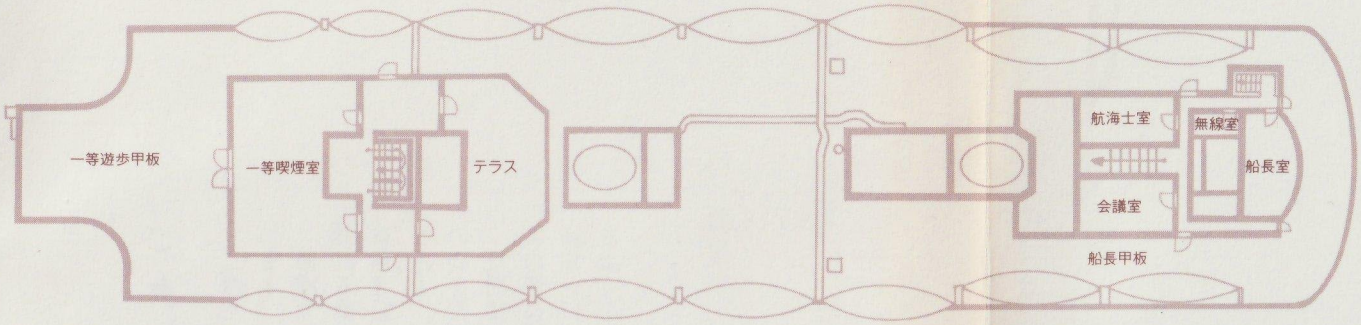
翔洋丸

デッキプラン

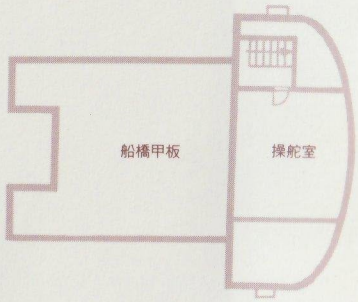
●翔洋丸主要目

船　名：翔洋丸
船　種：客船
長　さ：一六七・六三九メートル
幅　：一九・二二六メートル
深　さ：一一・七六五メートル
満載喫水：九・六九二メートル
総　噸　数：一三、四〇二噸
速　力：一九・〇七〇ノット
主　機　関：直結式タービン三基
最高出力：二〇、八〇二馬力
竣　工：明治四十一年〇月〇日

4F 端艇甲板 ボート・デッキ
BOAT DECK

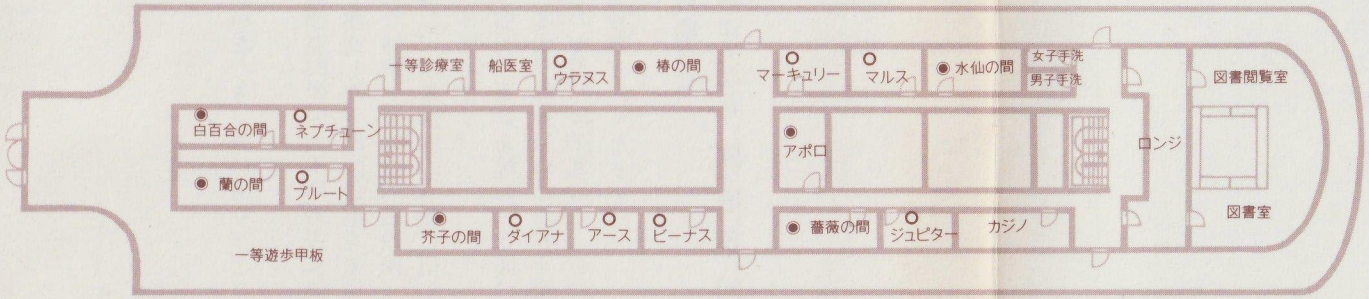


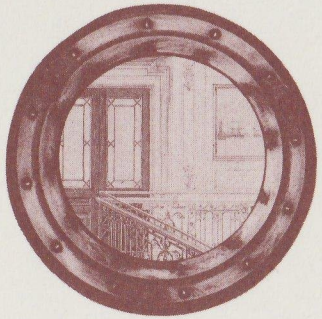
5F 航海船楼甲板 ナビゲーション・デッキ
NAVIGATION DECK



◉ 特別室
○ 一等客室

3F 遊歩甲板 プロムナード・デッキ
PROMENADE DECK





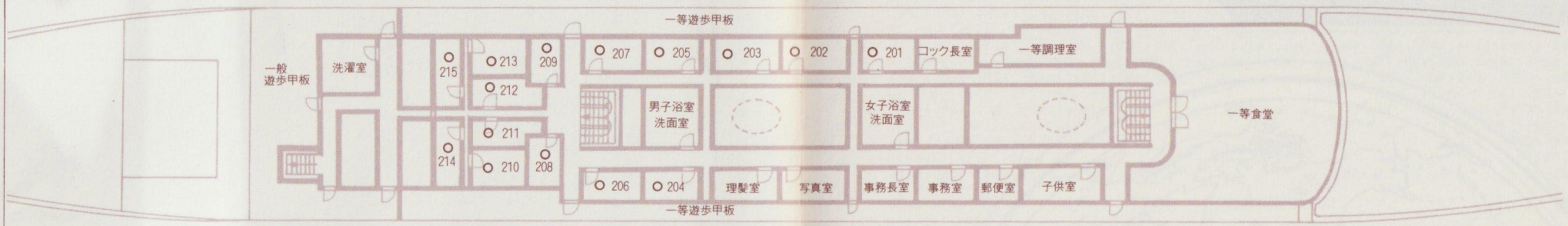
＊船内の様子をお知りになるには、あなた様の船室と各公室の経路をお確かめになるのが一番よろしいかと思われます。御乗船後、すぐにでもこの案内書を携えられ、船内を歩いてみられることをお勧めします。

＊船内にて、もしも迷われた場合には、お近くの係員まで御遠慮なくお申し出ください。丁重に御案内致します。

また、各階段ホール左右の壁に「現在位置と各公室」の図を掲示しておりますので、どうぞ御利用ください。

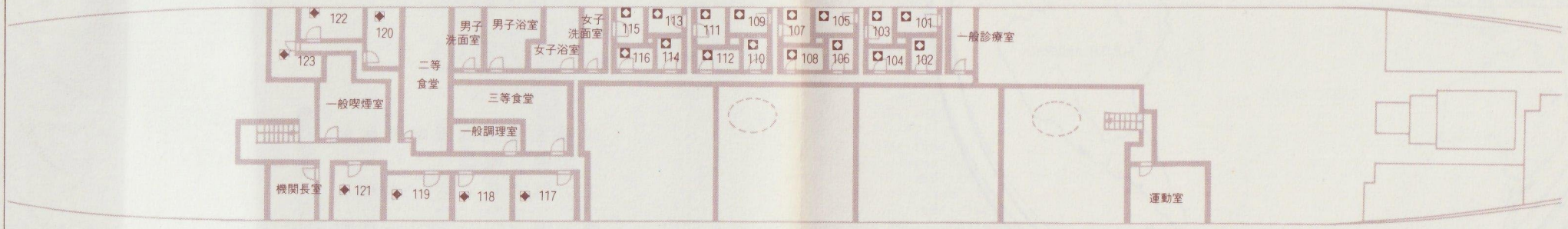
＊一等の御乗客の客室及び公室は二階より五階まで、二等、三等の御乗客の客室及び公室は一階と二階の一部であります。また、自等級以外への御出入には船長の特別な許可が必要となりますので、御注意ください。

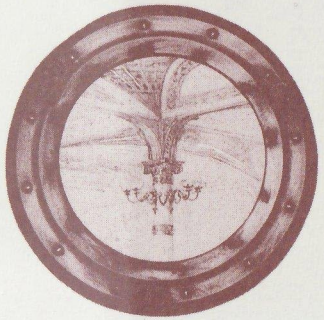
2F 船橋楼甲板 ブリッジ・デッキ
BRIDGE DECK

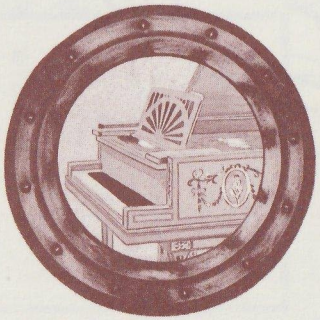


○ 一等客室
◘ 二等客室
◆ 三等客室

1F 上甲板 アッパー・デッキ
UPPER DECK







桑港航路圖

亞細亞汽船

亜細亜汽船太平洋航路
桑港航路

翔洋丸が就航しておりますのは、太平洋航路の桑港航路であります。本航路は、翔洋丸の就航以来年々の充実を見ており、「太平洋の表玄関」とも呼ばれております。日本と北米大陸とを連絡する太平洋航路には、桑港航路の他に南米西岸航路、並びにシアトル航路がございます。

各船室の御案内

一、客室について

翔洋丸の客室について御案内申し上げます。
本船の客室は特別一等、一等、二等、三等の階級に別れております。

◎特別室、一等客室 (Suite Room & 1st Class Cabin)
本船三階に六室設けております特別室は、居間、寝室、浴室を一組にした最高級の豪華な客室であります。六室それぞれに薔薇、蘭、白百合など花の名称がついており、家具装飾品は、すべて英国のロイヤル・ヒルトン社製作によるものです。どの室も広くゆったりとした格調高い雰囲気をたたえております。
また三階の一等客室八室には、ダイアナ、マーキュリー、ビーナスなど惑星の名称がついており、どれも甲板に面した見晴らしの良い室でございます。尚、一等客室は二階にもございます。

◎二等・三等客室 (2st Class Cabin & Steerage)
二等客室は、各四人詰で十六室、本船の一階にございます。寝台は二段造りで、上段の御乗客のために取外し自由の梯子(ハシゴ)を用意しております。
三等客室は八人から十八人詰で七室、同じく一階にございます。寝台は二段造りで、ブランケットの用意はしておりますが、御不足であれば規定の料金にて厚手の寝具を貸与いたします。

二、各公室について

翔洋丸の各公室について御案内申し上げます。
(但し、以下の公室はすべて一等専用にて、二等、三等の御乗客は御立入りできませんので御承知おきください。)

◎ロンジ (Lounge)
ロンジは本船の三階船首寄りにございます。本船の代表的公室であり、公式の催しやダンスパーティなどは、すべてこの室にて行われます。特別製のグランドピアノ、日本伝統工芸を駆使した特製織布地の椅子、ウォルナットを用いた卓子(テーブル)、眺めのよい格子窓など、その趣向をこらした装飾は、陸上のどのような一流ホテルにも劣らぬ優美な豪華さを備えております。

◎一等喫煙室 (Smoking Room)
一等喫煙室は通風に適した四階船尾の端にあり、欧州の紳士クラブを思わせる重厚な造りの社交室であります。この室は遊歩甲板に接しており、室の正面中央の扉を左右に開けば、直ちに眺望の良い甲板へ赴くことができます。
また、この室にて飲物を御所望の場合は給仕に御申し付けください。麦酒(ビール)、葡萄酒(ワイン)、カクテルなど、すぐに御持ちいたします。

◎テラス (Terrace)
本船のテラスは四階船尾寄りにあり、アール・ヌーヴォーの特徴を生かした窓、ゆったりと心地よい籐製の椅子、雪白なる布で覆った卓子が、くつろぎに満ちた雰囲気をかもし出しております。

◎図書室 (Library)
本船の図書室は三階のロンジ奥にございます。ステンドグラスを豊富にあしらった、知的な雰囲気の漂う落ち着いた室であります。図書室には多くの外国小説、海事書籍のほか、和書の読切り講談本等も収蔵しております。
また、閲覧室には墨汁(インク)、書簡紙(レターペーパー)、封筒(エンベロープ)の備付けがあります。

◎カジノ (Casino)
本船の遊技施設の一つであるカジノは、三階船首寄りにございます。遊技の種類はトランプ、西洋双六(バックギャモン)、西洋将棋(チェス)、西洋挟将棋(ドラフト)、囲碁(ダルン)、投矢などです。この室の一隅にはバーの設備があり、ウイスキーはもとより、ブランデー、ワイン、麦酒など外洋客船ならではの高級銘柄を取り揃えております。

◎一等食堂 (Dining Saloon)
本船の一等食堂は、二階船首寄りにございます。この室は船幅一杯の広さをとった本船最大の公室であります。欧米の高級レストランにも劣らぬ豪華な料理と、給仕のいきとどいた応接は、必ずご満足いただけるものでありましょう。

◎子供室 (Children Room)
子供室は、二階一等食堂近くにございます。宝箱一杯の玩具、可愛いらしい木馬など、お子様の大好きなものをいっぱい用意しております。また、危険のないよう係員が指導いたしますので、御安心して御遊びいただけます。

◎運動室 ((Athletic Room)
運動室は一階にございます。船上での運動をお楽しみになりたい方のために、最新式の器械装置や設備をいろいろ取揃えております。
＊この他、五階操舵室横の甲板の眺望、ことに満天の星空は特筆すべき素晴らしさであります。ぜひ一度御覧ください。

三、その他施設について

その他、本船の施設について御案内申し上げます。
尚、この施設はすべて二階にございます。

◎郵便室
〔御利用時間　自午前九時　至午後七時〕
郵便室では、郵便物の受け渡し、及び無線の申し込みなどを主な業務としております。郵便物はここへ御持ちになり、郵便箱へ御入れください。

◎事務室
〔御利用時間　自午前九時　至午後七時〕
事務室では、御乗船中の手続き全般、御乗客間の苦情受付のほか、貴重品の御預かりなどをいたしております。なお、御利用時間外でも御用の際には事務長室が隣りにございますので、御遠慮なく御申し出ください。

◎理髪室
〔御利用時間　自午前九時　至午後七時〕
身じたくを御整えになるには、理髪室を御利用ください。本船の理髪室では、最新の設備を揃え、サロン的なムードの中に、常に流行の匂いを漂わせております。

◎写真室
〔御利用時間　自午前十時　至午後七時〕
本船に御乗船の記念として、肖像写真を御撮りになりたい方は、ぜひ写真室まで御申し出ください。一流の写真家が撮影いたします。尚、御申し込みは午前中に御願いいたします。

◉御乗客への御願い

※御乗船時御一読願います。

一、御服装　船中にては御自分の客室外は、街路などと同様に一般公共の場であります。ことに本船は外国航路船で、外国人の同乗客もありますから、皆様も外国の都市におらるる積りで御服装に御注意を願います。

一、喫　煙　船内にては、喫煙は所定の場所にて御願いします。ことに甲板上での喫煙の際、燐寸（マッチ）、煙草の燃残、吸殻などの御始末には充分御注意ください。

一、食事時間　船内にては共同生活でありますから、御乗客の皆様も時間を厳守せらるる事は申すまでもありませんが、ことに食事の時間に遅れられますと、同席の御乗客の迷惑になりますから、御注意願います。

一、入　浴　二階一等及び二等、三等は共同浴室です。尚、入浴時間は左記の通りです。

・自午後四時　至午後十時三十分

一、消　灯　午後十一時以後を一般就寝時間として、公室その他において消灯いたしますから、同時刻以後は声高の談話及び合唱など、同乗客の安眠を妨げる様な事をなさらぬ様御願いいたします。

一、食膳の調理　本船のコック長は王桂徳、司厨長は赤松鏡太郎でございます。食膳に関する御希望がございましたら、何なりと御申し付けください。

一、船室の清掃　各客室付の給仕が毎朝室内の清掃に伺います。また、衣服などの洗濯物は洗濯室にて御洗いいたしますので、この折給仕に御渡しください。

一、悪天候時の御願い　悪天候時には、催物等の変更を与儀なくされる場合があります。また、悪天候下では、安全確保のため船長より御乗客の皆様に御願いすることもございます。速やかに御従いください。

一、苦情その他　一等御乗客の本船における待遇及び同乗客間の苦情は、二階事務室にて受付けます。尚、本船の事務長は片桐幸蔵でございます。

一、診療室の御利用について　船酔いをはじめ御気分のすぐれぬ方は、診療室にて診察いたします。本船の診療室には、あらゆる医療器具及び薬品を揃えております。本船に乗船しております船医は葛城孝雄でございます。尚、一等の御乗客は三階の一等診療室、二等、三等の御乗客は一階の一般診療室を御利用ください。

◆序章

1920 SERIES

藤堂龍之介探偵日記

黄金の羅針盤

翔洋丸桑港航路殺人事件

第一章　船上での出会い

一

大正十二年（一九二三年）、九月九日。

折しも日本客船・**翔洋丸**は横浜への出航を控え、桑港の波止場に海面高くその姿を現していた。桟橋は見送りの客であふれ、船出の風景はいつもながらの賑わいを見せていたが、しかしその中で水面に映る翔洋丸の姿は、なぜか寂しげに揺れていた。

翔洋丸は、桑港航路を走る**亜細亜汽船**の客船である。

明治四十一年（一九〇八年）、亜細亜汽船の創始者**華宮正左衛門**は、当時外国に押され気味であったこの航路の充実をはかるため、社運をかけた豪華客船の建造に着手した。その船は、日本初の大型高速タービンを装備し、英国製アール・ヌーボー様式の内装設備と超一流ホテル並みの最高級のサービスを完備した。

「洋上を翔ぶように駆けよ」――正左衛門のその思いを込めて『翔洋丸』と名付けられたその船は、極東と米国とを結ぶ太平洋航路を幾度となく行き来し、その華麗な姿を世界に誇った。しかし、やがて世界が大戦の時を迎え大型客船の建造

が相次ぐと、翔洋丸の活躍は次第に過去のものとなり、そして今、船齢十五年の老齢船となった翔洋丸は、華々しい表舞台から次第に遠ざかりつつあった。

船出の時刻がきた。白い煙とともに汽笛が鳴り響き、翔洋丸は見送りの人々を残して桟橋からゆっくりと離れていった。乗客たちは甲板に出て手を振り、見送りの人々と最後の別れを惜しんだ。船が港を離れるにつれて、デッキの下に白い紙テープが流れては落ちた。

藤堂龍之介（とうどうりゅうのすけ）は、その翔洋丸のデッキに立ち、遠ざかる桑港の丘をじっと見つめていた。龍之介にとって今回の船旅は、半年の外遊を終えての日本への帰国の途であった。

出航したばかりの船の甲板に立っては、初めての客も旅慣れた客もその誰もが落ち着いた心でいられないようであった。そして船員たちは、乗客の間を、あと始末のために忙しそうに行き来していた。藤堂龍之介はその騒ぎの中で、さっきから、一人の若い女のことが気になっていた。

その女は、船が港を離れる時プロムナードデッキの一番端に立ち、遠く離れていく港をずっと見つめていた。年の頃は二十二、三であろうか。濡れたように黒い瞳をした女で、柔らかな髪は風になびき、薄絹のドレスが揺れていた。

龍之介は初め、その女も他の乗客たちと同じように見送りの者との別れを惜しんでいるのだと思ったが、よく見ると、女の視線は桟橋の上に立つ人には向けられてはいなかった。その眼差しは、まるで遥か彼方を見ているように頼りなく、曖昧であった。女の目には、何が映っているのだろうか。

藤堂龍之介は、女のそばに立ち、声をかけた。
「もう、あんなにアメリカが遠くなりましたね」
女は、龍之介のその言葉に、黙ったまま軽くうなずいた。
「連れの方は、いらっしゃらないのですか？」
龍之介は、そう言葉を続けた。しかし、女は何も答えず、ただ遠ざかる港と海をそのままに見ていた。
女の横顔はとても美しかった。その瞬間、龍之介はなぜか、その女との運命的な出会いを心に感じていた。

二

翔洋丸での龍之介の部屋は、三階の『アースの間』と呼ばれる一等客室であった。その部屋の並びには、船尾に向って「ビーナス」「アース」「ダイアナ」「芥子」と四つの客室が続いていた。

『アースの間』は、落ち着いた造りの部屋であった。甲板に向かって付いている二つの丸窓は、なによりも眺めが素晴らしいものであったし、備えつけられた飾り棚や座りごこちのよいウォールナットの椅子は、新しくはないが使い込まれた心地良さがあった。

黄銅（しんちゅう）の丸窓から見える太平洋の大海原は、とてもおだやかであった。

夕食の時間になり、龍之介は部屋を出て通路に出た。

すると、ちょうどその時、偶然となりの「ビーナスの間」からもドアを開け出てくる者がいた。

それは出航の時、デッキにたたずんでいたあの女であった。

女は、龍之介の姿に気づくと軽く会釈をした。その会釈を返して、何か声をかけようとしたが、龍之介はその一瞬、言葉が口をついて出てこなかった。

女は、そのまま通路の奥に消えていった――。

三

やがてデッキに月明かりがさし、翔洋丸に夜が訪れた。
乗客たちは夕食を終えると、ロンジで酒を飲み語り合う者、カジノでカードゲームに興じる者など、船上での初めての夜をそれぞれに楽しみはじめた。

その夜、藤堂龍之介は、四階の喫煙室でグラス片手に居合わせた客たちと他愛ない話をしながら過ごしていた。しかし、さっきから龍之介の心に浮かんでいたのは、あの女のことばかりである。
夕食の時、龍之介は食堂であの女の姿を捜したのだが、見つけることはできなかった。それにしても、どうしてこんなにあの女のことが気がかりなのだろう。
龍之介は、歓談の人々の間を抜け出して、デッキに出た。
夜のデッキは昼間のざわめきが消え去り、そこには海からの青白い光が怪しく輝いていた。龍之介はデッキの手すりにもたれ、しばらくの間、思いにふけった。夜空には無数の星が輝き、船の後を追うように動いていた。
気がつくとそのデッキの奥の方に、誰かが立っている。龍之介は、暗闇に目をこらし、その人影を見た。
それは、あの「ビーナスの間」の客であった。

女は、ひとりで夜の海を見つめていた。何を思っているのだろうか。その姿は、龍之介の胸をせつなく騒がせた。

「――お客様、お楽しみのところ申し訳ございませんが、まもなく消灯時間でございます。お部屋にお戻りください」

突然、その龍之介に声をかける者があった。振り返るとそこに、タキシードに身を固めた男が立っていた。男は、この翔洋丸の事務長である**片桐幸蔵**（かたぎりこうぞう）であった。

「月夜に似合うもの――それはワインと美しい女、ですかな」

片桐はそう言って、龍之介の顔をじっとのぞき込むようにした。どうやらこの男は、さっきから龍之介の様子を見ていたらしい。

「ああ、いい月夜だ。こんな夜は時間など忘れ、楽しもうではないか」

龍之介は、わざと酔ったような話し方で答えた。すると、片桐幸蔵は急に、威圧的な声を出して、こう答えた。

「お気持ちはわかりますが、規則でございます。どんなお客様でも船の上では、船の規則を守っていただきます――」

龍之介は、片桐のその言い方にどこか不快な気がした。しかし片桐は、そんな龍之介の気持ちをさらに強くさせるかのように、さらに言葉を続けた。

「ところで、お客様は『アースの間』にご宿泊の藤堂様でございますね――

聞くところによりますと、藤堂様のご職業は私立探偵だとか。いや、探偵というお仕事、ずいぶんとたいへんなご商売なのでしょうな」

「――さあ、どうでしょうか。それより客船の事務長の方こそたいへんな仕事なのではありませんか。こうして私のような客のことまで、すべて知っていなければならないのですからね」

「そうお気を悪くなさらないでください。私共はつねづね、お客様のことを存じ上げてこそ、そのお客様にふさわしいサービスができるものだと考えている次第でして。つまり、客船のサービスと申しますのは……」

龍之介は、そんな片桐の言葉をさえぎり、こう尋ねた。

「ところで、あちらの女性は？」

「あの方ですか。あの方なら『ビーナスの間』にご宿泊されている**麻生多加子**（あそうたかこ）様でございます。なんでもカリフォルニアで金鉱を発掘して一躍資産家になったという方の奥様であると伺っておりますが。それにしても、本当に気品のある上品なお方で、まさにこの翔洋丸にふさわしいお客様でらっしゃる」

女の名前は、麻生多加子といった。

そしてその時はまだ、この女との出会いが、翔洋丸の船上で始まる殺人事件につながるものになろうとは、龍之介は想像さえしていなかった。

第二章　船上の人々

一

大正十二年（一九二三年）、九月十日。

その日の午後、**尾崎康平**は三階のプロムナード・デッキの奥に、カクテルを運んでいた。

カクテルグラスを乗せた銀のトレイを左手に持ち、康平は、デッキへのドアを右手で開けた。

「おっと！」

突然小さな男の子が、康平の横を小走りで駆け抜けた。

――あぶない、あぶない。

康平は、一瞬ひやりとしたが、トレイを落とさずにすんで胸をなでおろした。

実は、今朝もまた、客の目の前で運んでいた皿を落とし、司厨長からこっぴどく叱られたばかりであったのだ。

『尾崎！　おまえはいったい何枚皿を割れば気が済むんだ！』

康平の耳には、まだあの司厨長の甲高い声が残っていた。

尾崎康平は一等客室の専任ボーイであった。今年十九になる若者で、この翔洋丸で働き始めて一か月という新米乗務員である。まだ仕事も慣れないことが多く、それに生来のあわて者の性格も手伝ってか、しょっちゅう上の者から叱られてばかりいる。でも、外国航路の船で働くことは小さい頃からの夢であったし、波を切って走る船の上で果てしなく広がる水平線を見ていると、どんなにつらいことでも、康平はみんな忘れることができた。

康平は、今でもこの翔洋丸に初めて乗船した時のことを、よく思い出す。その時はじめて、康平は、船の中がこんなに豪華で広いものだということを知った。そして、こんなりっぱな船で働けることを心から誇りに思った。だから、乗務員の中に、この翔洋丸はもう古くておんぼろだの、もっと新しい船で勤務したいなどという者がいると知った時には、どうしてそんなことを考えるのか、不思議でならなかった。

そんな康平であったが、今回の航海に限って気がかりなことが一つだけある。それは、桑港で聞いた東京での大地震の知らせであった。康平が日本を離れている間に、東京に大地震がきて、何もかもが壊れてしまったという。

――母ちゃんたちは、無事だろうか。

康平は、日本にいる家族のことを考えると、心配で仕方がなかったが、この船の上ではどうすることもできない。

それにしても、この船の一等の乗客たちは、東京の大地震のことを知らないのだろうか。まさかそんなこともないだろうが、康平の目からは、客たちはまるでそんなことにはおかまいなしで、船旅を楽しんでいるようにも見えた。

きっと、この翔洋丸の一等に乗ってくる客たちは、自分などには想像もつかないほどの金持ちばかりで、地震だってへっちゃらなのだろう。康平は、ちょっとの間立ち止まって母親や幼い兄弟の顔を思い浮かべたが、すぐに気を取り直してプロムナードデッキを急いで歩いていった。

二

その日の午後、プロムナードデッキの片隅で人目をさけて、なにやら楽しげに話をしている一組の男女がいた。

「ほう、それでは菊子さんは、ハリウッドで女優を……」

「ええ、そうなんですのよ。父の事業の関係で三年ほど前に、アメリカに渡りましたの。そうしたら、父の取引先の中にハリウッドで映画会社を経営しているという方がいらして――」

「――なるほど。それでは、そのアメリカ人が、あなたの美しさに目を付け、あなたを女優にスカウトしたというわけだ」
「まあ、そんなことになりますかしら。ほほほ」
菊子と呼ばれた女は、鏡を見て何度も練習したような笑い方をした。
「いやいや、きっとあなたのような楚々とした大和撫子を目にして、いつも金髪や赤毛の大女ばかり見慣れている男たちも、真の女性の美しさを知ったのでしょうね。いや、アメリカ人といわずどこの国の男でも、あなたを目の前にしては、女の魅力を感じない男はいません」
「まあいやですわ、ふふふ。お世辞ばかりおっしゃって――」
「いや、私はそんなつもりで言ったわけではありません。こう見えても、私とて写真家のはしくれ。つまり、あなたの美しさが海を越えたものであると言いたかったわけで――」
「あら青沢さんって、ハリウッドの監督よりも口説き上手でらっしゃるわ」
「いや、まいったな。ははは」
男は「白百合の間」の宿泊客で**青沢豊彦**、女は「ダイアナの間」の**一条菊子**であった。しゃれた帽子と流行のドレスを身につけ、いわゆるモダンガールの様相を呈した一条菊子に、青沢豊彦は夢中な様子であった。
「菊子さん、今度、私のモデルになっていただけませんか」

その時、デッキの向こうから歩いてくる者があった。豊彦の妻、**青沢キリ子**（あおさわきりこ）である。キリ子は黒いドレスを着た細身の女で、まるで柳が風に揺れるようなゆらゆらとした歩き方で、長椅子で横になっている二人に近付いてきた。

「あら、あなた。こんなところにいらしたの――」

「あ、ああ。おまえか――」

青沢豊彦は、キリ子の姿を見たとたん、それまで見せていたにこやかな笑顔を急に、不機嫌そうにした。

「ご気分が悪いなんておっしゃってたものですから、心配してましたのに」

「ああ、あれなら、さっき薬を飲んだからな。もう、とっくに治った」

「それはよろしかったわ。きっと、若くておきれいな方とご一緒ですと、お薬の効き方も、お速いのですわね――」

「ふん、何をばかなことを言っている」

キリ子の皮肉っぽい口ぶりに、豊彦は思わず言葉を濁した。豊彦とキリ子の間には、冷ややかな気配が流れた。

その様子を見てか、一条菊子は、青沢豊彦にこう話しかけた。

「海風にあたっていると、なんだか体が冷えてきましたわ。私、そろそろお部屋に戻ります――」

「菊子さん、もう少しいいじゃないですか。もうすぐカクテルも届きますから」

「残念ですけれど、それはまた、次の機会にでも――。青沢さん、お話とても楽しかったですわ」
菊子は品をつくった声で豊彦にそう答えると、椅子から立ち上がった。
「あら、私……、何かお気にさわるようなことをいいましたかしら」
キリ子は、菊子に向かってツンとした声でそう言ったが、菊子はそしらぬ顔をした。
「それでは、ごきげんよう」
菊子はそう言って、キリ子の方に視線を合わせもせず、靴音を響かせて足早に歩き出した。

三

「あ、あっ！」
「きゃああっ！」
その瞬間、尾崎康平はしまったと思った。まさか、突然目の前に誰かが現れてくるとは思ってもいなかったのだ。しかし、その時にはもう間にあわなかった。その客と康平は、正面から体当たりしてしまった。

尾崎康平にぶつかったのは、一条菊子であった。互いにふいの出来事であったので、二人はかなり激しく体をぶつけあった。康平は持っていたトレイを落とさないように必死で体をつっぱったが、それが結果として菊子と足をからませることとなり、康平は菊子を突き飛ばすようにして前のめりに転んでしまった。

デッキの床には、音を立ててカクテルグラスがこぼれ落ち、そして、一条菊子も、その康平にはじきとばされるようにして、その場に倒れこんだ。

その時であった。ぶつかった拍子にどちらかの体がもたれかかったのだろうか、ちょうど、デッキの隅に置かれていた樽のひとつが、ガタンという音を立てて、倒れて転がった。

樽は、そのまま三度ほど回って転がると、デッキの手すりのところで止まった。そして、そのとたん、その蓋がバタンと外れて落ちた。

「も、申し訳ございません！」

康平は、急いで起きあがると、菊子に向かって最敬礼であやまり、床に散らかったグラスを拾い集めようとした。

「もう、何をしているのよ――痛いじゃないの！」

菊子は床に腰をついたまま、康平に文句を言った。そして、片手を前に突き出し、康平にその手を取らせて立ち上がった。

「菊子さん、だいじょうぶでしたか――」
その物音を聞きつけて、青沢豊彦がその場に駆けつけてきた。夫人のキリ子も少し遅れてその後をついてきていた。ドレスの汚れをハンカチで何度も拭う菊子に向かって、キリ子は、小声でぽつりとこう言った。
「前をよく見て、お歩きになっていないからよ……」

尾崎康平は、三人の客が話をしている間に、落ちたグラスを拾い集め終わり、そして、例の倒れた樽を起こそうとしていた。しかし、樽を起こそうとした康平の手は、その途中で、ピタリと止まってしまった。
樽の中に何かが入っていた。蓋の開いた樽からは、その何かが少しだけ見えていた。いったい、何だろうか――それは、何か白いもののようでもあり、土色のものであるようにも見えた。康平は樽に頭を近づけ、それを確かめようとした。

「な、なんだ……!?」
康平はそれを見ても、それがいったい何であるのか、すぐにはわからなかった。しかしそれが何であるかがわかった瞬間、康平の顔色はみるみる青ざめていった。

「――どうしたのよ」
菊子と豊彦、そしてキリ子の三人は、康平のその様子にようやく気づいて、声をかけた。しかし、康平は何か答えようとはしているが、その肩は小刻みに震えて、声にならない。

「おい、どうしたというんだ」
青沢豊彦はそう言いながら、康平のそばに行って、その樽の中をのぞき込んだ。しかし、それを見たとたん、青沢豊彦は康平と同じように顔色を青くさせ、驚きの声をつまらせながら、こう言った。
「が、がい骨だ……」

転がった樽の中からは骨だけの手が、まるで這い出てくるようにダラリとのびていた。
樽の中にあったもの、――それは、紛れもなく白骨と化した人間の死体であった。

第三章　船上の秘密

尾崎康平の知らせで、その場に一番に駆けつけたのは、司厨長の**赤松鏡太郎**であった。赤松は、亜細亜汽船に勤務して二十数年というベテラン乗務員である。その間にはいろいろな事態に出くわしたが、樽の中から、白骨死体が発見されたなどということは、もちろん初めてのことであった。

――騒ぎを大きくしてはいけない。

現場を見た赤松は、そのことだけ考えて、事態に対処した。

赤松は、樽の中の白骨を見るなり、すぐにあたりを見回した。そして、この事件の目撃者がその場に居合わせた四人の他には誰もいないことを確かめると、すばやく樽の蓋をもとどおりにした。そして、四人の男女をその場にとどめ、船長の**鷹取重四郎**を呼びに走った。

「どういたしましょうか、船長……」

赤松鏡太郎は、腕を組んでじっと目をつぶったまま尾崎康平の報告を聞いていた鷹取船長に、おそるおそる尋ねた。

鷹取船長は、ゆっくりと目を開け、静かな声でこう答えた。
「どういう処置をとるべきか、その答えはすでにわかっているはずだ」
「ははっ、もちろんです。船長」
赤松は、自慢の髭をピンと引っ張り、したり顔で深くうなづいた。

「皆さん――」
鷹取船長は、白骨死体の発見現場に居合わせた四人の男女を前にして、力強い声で語りかけた。
「我が翔洋丸の上でこのような事態が起こったことは、非常に遺憾なことであります。この予期せぬ出来事に遭遇されて、さぞかし驚かれたことでありましょう。この件につきまして、私が船長の名にかけて緊急に調査し、その原因を究明して事実を明らかにすることをお約束いたします。しかし――」
鷹取重四郎は、そこで、一条菊子、青沢豊彦・キリ子夫妻、そして尾崎康平の顔を、ひとりひとりじっと見据えた。康平は、船長のその厳しい眼差しに緊張して、思わずビクッとした。

「ここで、皆さんにひとつだけお願いしたいことがあります。それは、この船が日本に着くまでの間、この出来事のことは決して他言なさらないと、この場で約束していただきたいということ――いや、これはお願いというより、この航海の間、乗客の方々に無用な不安を抱かせたくはないという、船長としての私の命令でもあります。――皆さん、おわかりですね」

鷹取船長の重く響く言葉に、四人は黙ってうなづいた。

しかし、鷹取船長の言ったこの『予期せぬ出来事』が、これから翔洋丸の上に、思わぬ事件を引き起こすことになろうとは。

白骨死体の発見――実はこれこそが、すべての事件の始まりを告げる恐しい出来事であったのだった。

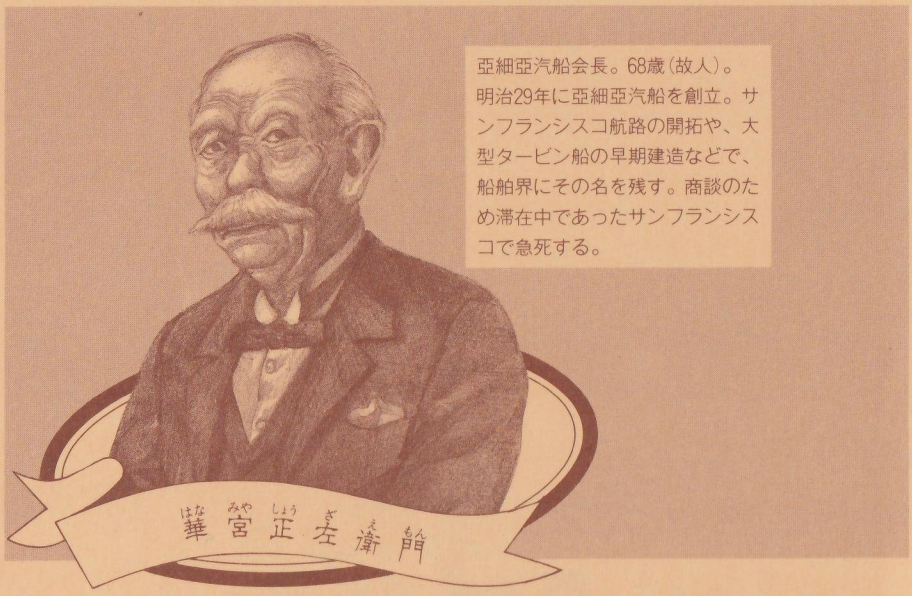
◆人物紹介

1920 SERIES

藤堂龍之介探偵日記

黄金の羅針盤

翔洋丸桑港航路殺人事件



亞細亞汽船会長。68歳（故人）。
明治29年に亞細亞汽船を創立。サンフランシスコ航路の開拓や、大型タービン船の早期建造などで、船舶界にその名を残す。商談のため滞在中であったサンフランシスコで急死する。

船長。55歳。
責任感が強く、落ち着きのある人柄で、部下から信頼されている。老朽化したが、亞細亞汽船の栄光を築いてきた翔洋丸をこよなく愛している。

機関士長。58歳。
機関部の責任者として翔洋丸のエンジン部をあずかる。実直だが頑固な性格で、無口。

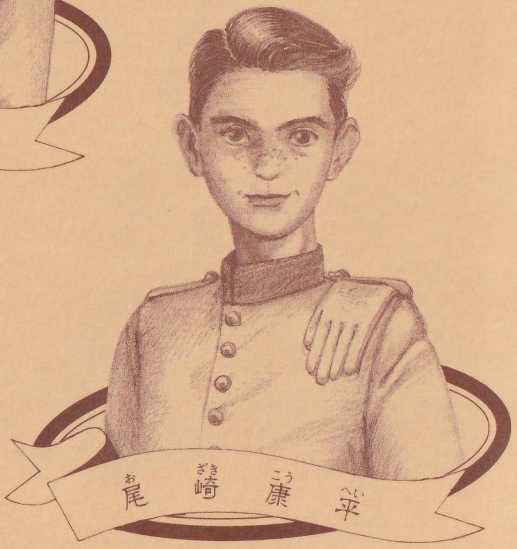
航海士長。45歳。
甲板部の責任者。出世欲が強く、欧米諸国並みの最新船で乗務したいという希望を持っている。

一等無線士。30歳。
無線部の責任者。独身。真面目で誠実な人柄は、船長にも信頼されている。

事務長。48歳。
客船部の責任者。堅物で、融通がきかない。また、几帳面で金に細かい。趣味は切手のコレクション。

司厨長。42歳。
一等客専用食堂の担当。ベテランの乗務員だが、金持ちの客を特別あつかいし、客によってその態度を変えるところがある。

ボーイ。19歳。
一等客室専任係。今回が初めての外国航路の仕事で、やる気まんまん。しかし、おっちょこちょいな性格で、失敗も数知れず。



コック長。38歳。
調理部の責任者。中国人。名コックの誉れ高く、並外れたグルメ。横目で人を見る癖がある。

楽団員。28歳。
翔洋丸専属楽団のバイオリニスト。神経質でおとなしい性格だが、酒を飲むと人が変わったように暴れることがある。

船医。40歳。
医務部の責任者。独身。誰に媚びることなく、医者の腕もたつ。ただ、女に関しては甘く、よく若い女性客と問題を起こしている。

看護婦。25歳。
医務部の看護婦。日独の混血で、どこか寂しげな笑顔をみせる。その献身的な優しさは、乗務員の心の安らぎとなっている。

麻生多加子の夫。34歳。
10代でアメリカに渡り鉱山で働き、やがて金鉱を発掘し、いちやく大富豪となる。半年前に謎の失踪を遂げている。

麻生伊作

麻生伊作の妻。22歳。
「一等客室・ビーナス」に宿泊。
失踪中の夫を捜すために、日本へ帰国中。美しく魅力的な女性だが、どこか謎めいている。

麻生多加子

写真家。36歳。
「特別室・白百合の間」に宿泊。
カリフォルニアでの撮影旅行から帰国中。船酔いがひどい様子で、いつも薬を飲んでいる。

青沢豊彦の妻。32歳。
「特別室・白百合の間」に宿泊。
エキセントリックな性格で、よくヒステリー状態になる。夫の豊彦とは、旅行中に何かもめごとがあった様子。

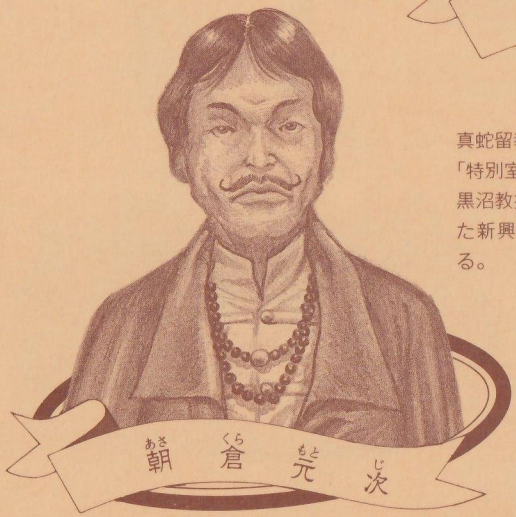
女優。24歳。
「一等客室・ダイアナ」に宿泊。
ハリウッドで女優修行していたという。3年ぶりに日本へ帰国。その華やかな容貌は男性客の注目を浴びている。

帝都商船専務。50歳。
「一等客室・マルス」に宿泊。
華宮正左衛門とは、旧知の間柄。サンフランシスコでの正左衛門の死にも、立ち会っていた。

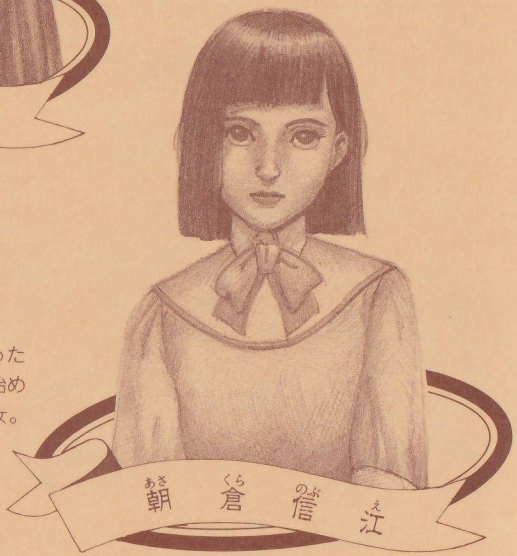
帝都商船社員。30歳。
「一等客室・マーキュリー」に宿泊。
燃料部の社員で、京極富三郎に同行している。

マッチラベルのデザイナー。32歳。
「特別室・薔薇の間」に宿泊。
アメリカ旅行から帰国中。その態度や行動には、不審な点が多い。

神秘魔術の研究家。60歳。
「一等客室・プルート」に宿泊。
かっては大学で教鞭をとっていたが、神秘魔術への異常なのめりこみから、学会を追放される。朝倉親子と同行している。



真蛇留教の教会頭。38歳。
「特別室・芥子の間」に宿泊。
黒沼教授とともに、自分の娘を教祖にした新興宗教の布教活動に力を注いでいる。

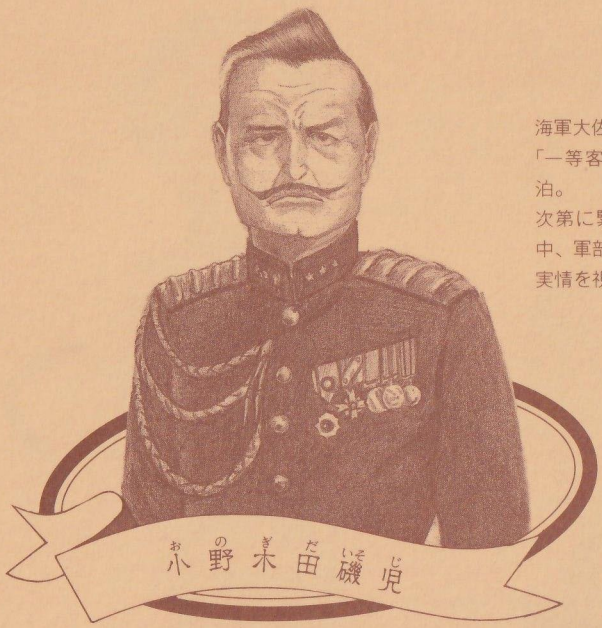


真蛇留教の教祖。17歳。
「特別室・芥子の間」に宿泊。
生まれた時は口がきけなかったが、7歳の時に奇跡が起こり始めたという。寡黙で神秘的な少女。

華宮正左衛門夫人。62歳。
「特別室・椿の間」に宿泊。
旅先で急死した夫の仮葬儀をすませ、その遺骨とともに日本へ帰国中。体調がすぐれず、車椅子を使っている。

華宮夫人の秘書。28歳。
「一等客室・ウラヌス」に宿泊。
いつも冷静で、感情を表に出さない。占星術にたけており、華宮夫人から絶大な信頼を得ている。

音楽家。24歳。
「特別室・蘭の間」に宿泊。
イギリス人。高名なバイオリニスト。亞細亞汽船に招待されて、日本へ演奏旅行に向っている。



海軍大佐。45歳。
「一等客室・ネプチューン」に宿泊。
次第に緊迫してきた国際情勢の中、軍部の要請で、各船舶会社の実情を視察中。

実業家。40歳。
「一等客室・アポロ」に宿泊。
アメリカ人。石油関係の企業を経営している。小野木田大佐とは懇意な間柄である。

◆客船風俗画報

1920 SERIES

藤堂龍之介探偵日記

黄金の羅針盤

翔洋丸桑港航路殺人事件

客船風俗画報

船旅のたのしみ

華麗なる洋行時代

船旅といえば、景色が良いこと、食事の贅沢さ、乗組員が親切なことなど、その魅力はさまざまです。

ここで、「翔洋丸」が活躍していた一九二〇年代の船旅の楽しさを、客船の歴史をからめながら、いくつか紹介してみましょう。

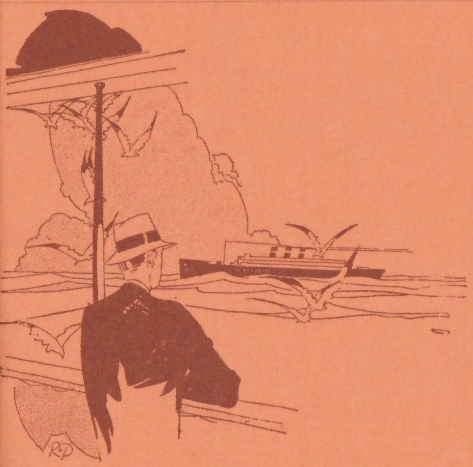
*

当時、日本から外国に行くには船を利用するしか方法はありませんでした。このため、外国に行くことを「洋行」と言ったのです。当時の豪華客船は「海に浮かぶ超一流ホテル」と呼ぶにふさわしい設備とサービスを完備していました。それは、一部の特権階級の人々が乗り合わせ、豪華なパーティやディナーを楽しむ社交の場だったのです。もっとも、ジェット機などなかった当時では、「楽をして目的地に着ける」ことが、もっとも大きな贅沢だったのかもしれません。

船内特有の異国情緒

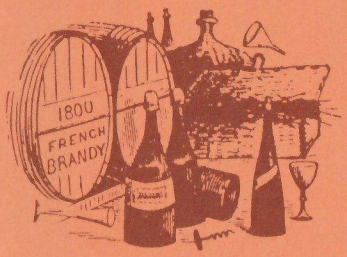
客船、ことに「翔洋丸」のような外国航路の船は、日本文化の展示場、動く国土の一部として諸外国の人々の目にも触れることから、当代第一級の技術を駆使して造られていました。

また、当時の客船は、欧米文化摂取の最前線としても活躍しており、ジャズやカクテルをはじめ、当時の最新流行は、これら外国通いの客船によって日本にもたらされたものです。また、船内の各施設の調度品は、目もくらむような世界の一級品が揃えられ、乗客の目には客船はもっとも異国情緒に満ちた場所として映っていたことでしょう。



禁酒法時代の楽園

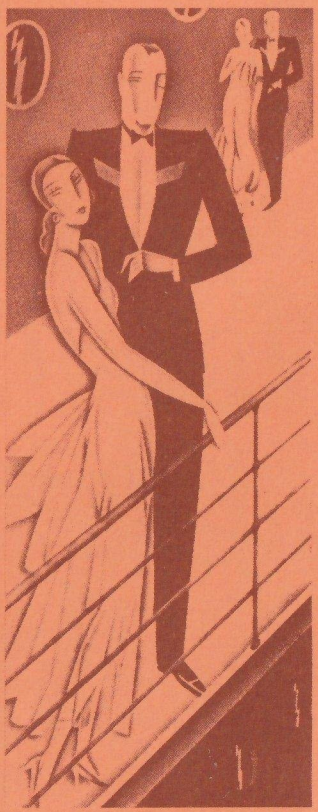
船上では、豪華なディナーのあと、毎夜のようにダンスパーティーが催され、それが終わるとひとしきりバーがにぎやかになります。当時のアメリカはちょうど禁酒法の時代。それだけに船内のバーの盛況ぶりは大変なものだったようです。船のバーテンダーは酒の好みがハッキリしている欧米人を相手にするだけあって、洋酒に関する知識が実に豊富。それだけでなく、彼らには乗客の健康を預かっているという使命感もあり、飲んでいる客の顔色で身体の調子を察して、それに合った酒を出すという名バーテンダーぶりでした。



洋上の社交界

客船の黄金時代だった当時、船上は上流社会の人々のサロン、社交場でした。船に乗り合わせた名士同士が懇意になることも珍しいことではありませんでした。

また、船の旅は現在のジェット機の旅と違って、目的地に着くまでに時間がたっぷりあります。当時の人々は、船旅の中で欧米人と食事をしたり、会話をしたり、寄港地ではその国の風土や国情、人間性などに触れたりしながら目的地に着くことができたのです。つまり当時の船旅は、欧米流のマナー、エチケット、ものの考え方を学び、社交性、国際性を身につける格好の場だったのです。



右舷と左舷

当時の船旅のなかで何より大変だったのは、その暑さです。夏は、船上では気候の暑さに機関の暑さが加わり、陸上の猛暑の比ではありませんでした。

英国には「outward port, inward starboad」という言葉があります。「outward」は左舷、「inward」は右舷、つまり船の右側と左側ですが、これは英国からの大西洋航路を旅するときは「行きは左舷側に、帰りは右舷側に乗れ」という意味です。つまり、行きも帰りも太陽の当たらない北側に乗れ、ということなのです。

待遇は懇切丁重

船乗りの誇り

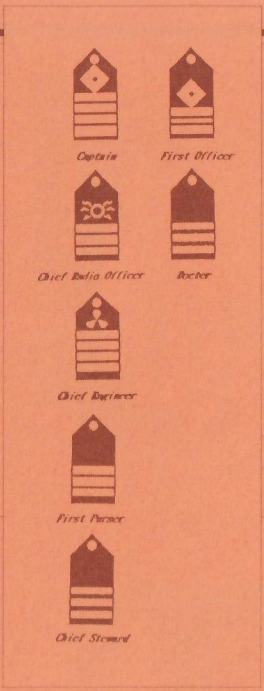
客船はいわば二十四時間体制の「動くホテル」です。いったん船が出航すると、港につくまでの間、乗組員のうちの誰かが常に働いています。

乗組員は船長を頭に甲板部、機関部、無線部、医務部、そして船客部に分かれています。

甲板部は、航路を決定し、船を動かすのが役割。機関部は船内の機械すべての保守、修理を担当します。無線部は船の耳として無線による通信を担当。医務部では、船医と呼ばれる医師が乗客・乗組員の健康を預かっています。

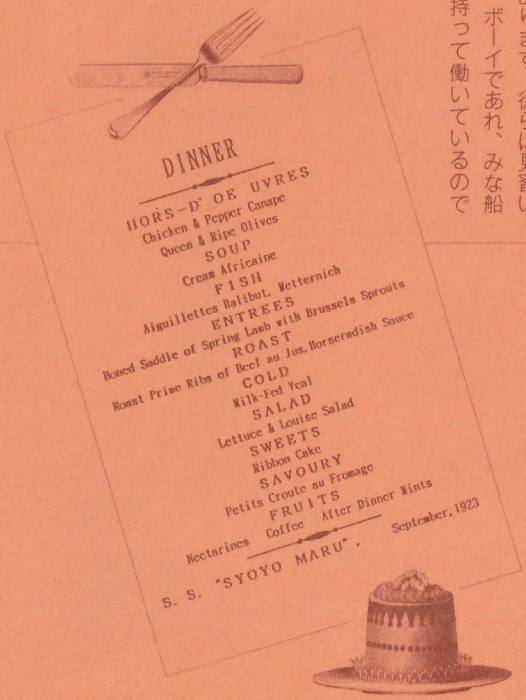
船客部では、事務長をトップに船客業務全般を担当していて、コック長、司厨長なども この船客部に属します。当時の客船では、船客業務の水準を高めるため、就航前に事務長、司厨長を欧米に派遣・研修するなど、細心の配慮が払われていました。

このように、一口に客船の乗組員といっても、多種多様の仕事があります。彼らは見習い水夫であれ、サロン・ボーイであれ、みな船乗りとしての誇りを持って働いているのです。



申し分のない食膳の調理

船旅の楽しみの中で、食事は重要な要素です。当時の客船でも、献立はどんな美食家でも満足するほどの質と量を備えており、その材料は世界の一流品をふんだんに使用していました。食器はすべて英国のシルバー製、豪華なディナーは白い給仕服のボーイのサービスで始まり、専属のバンド演奏も加わって、すばらしい雰囲気ですすめられたのです。



快適至極な乗り心地

客船の施設は大きく公室と客室に分けられます。公室、特に一等客専用のロンジ（ラウンジ）や喫煙室などは、その船の代表的な社交室として最も豪華な造りになっています。

また、船内のいたるところに黄銅の円窓が配されています。金色の黄銅は美しいけれども実は錆びやすく、毎日磨き上げなければなりません。それでも黄銅を用いるのが「豪華」客船たる由縁なのです。

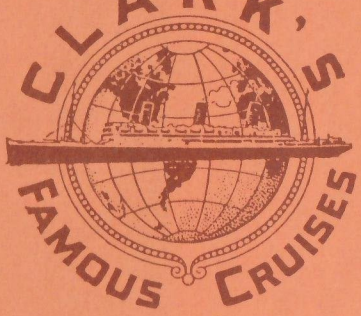
その他、客船ではさまざまな趣向を凝らし、乗客に最高のサービスを提供していました。たとえば、給仕は毎朝客室の清掃に訪れ、器物の整頓のほか、毛布およびタオルを美しい花形に結ぶのです。この結び方にも数種あって、たいへん優美なものでした。

蒼空と碧海

甲板からの眺めも船旅の大きな魅力です。白い航跡に続く水平線、青さを競いあうような海と空。金色の夕日や、夜の波間に浮かぶ月など、甲板から見る景色は一日の中でさまざまに趣を変え、見る者を飽きさせません。もっとも印象的なのは、月も雲もない晩。凪いだ海、星降る甲板を散歩するのは素晴らしいものです。それは、地球上で星を見るのに一番適した場所は船の上だ、といわれるほどです。

また、甲板と一口にいっても、階によってその眺望も変わってきます。屋根のある遊歩甲板では、デッキチェアに寝そべって、ゆったり本など読むのもいいし、屋根のない上層の甲板では、海を眺めながら日光浴。ボーイを呼んで飲物を注文すれば、すぐに運んでくれます。これも、客船ならではの贅沢です。

船はくろがね 蒸気船時代の到来



何世紀もの間、船はその動力を自然や人間の力に頼ってきました。長い帆船時代が終わり、蒸気船が主流になり始めたのは一八六〇年代からです。

蒸気機関の導入によって船上の生活は大きく変化し、船内の設備も改善されていったのです。客船の発展も、蒸気機関の発明あってのものでした。また、蒸気機関の中でも、高速で振動も少ないタービン機関が、当時の客船の主機関として盛んに使われていました。

ところで、船の煙突はどんな役割をもっているかご存じでしょうか。もちろん、船の煙突も陸上と同じ機能で、エンジンルームや厨房からの排気管を収めている構造物なのですが、むかしの客船にとって煙突はもう一つ別の役割も持っていたのです。

欧米の渡航客の間では、蒸気船の煙突の数が船の速さに比例すると考えられており、船会社の商売上、煙突の数は重要な要素でした。欧州から米国への渡航客が、いざ乗船という段になって、乗船案内のポスターの船より自分の乗る船の煙突の数が少ないといってクレームをつけたという話が残っているほどです。

大西洋航路では四本煙突が最も人気で、そのため、英国船「オリンピック」をはじめ、三本で足りる煙突に偽煙突(飾煙突)を加えて四本煙突にした船も少なくなかったのです。また、偽煙突は単なる飾りだけではなく、その内部は倉庫や展望台として使用されていたようです。

日本の客船では、史上二本煙突が最多で、その船数も十隻ほどしかありません。もちろん「翔洋丸」はこの二本煙突の客船です。

モダン航路

客船の船内設備や装飾は、同じ時代に同じ国で造られたものでも、その就航する航路によってさまざまに違います。これは、航路によって乗客の人種・職業・地位が異なるためそれぞれに合わせて配慮されていたのです。

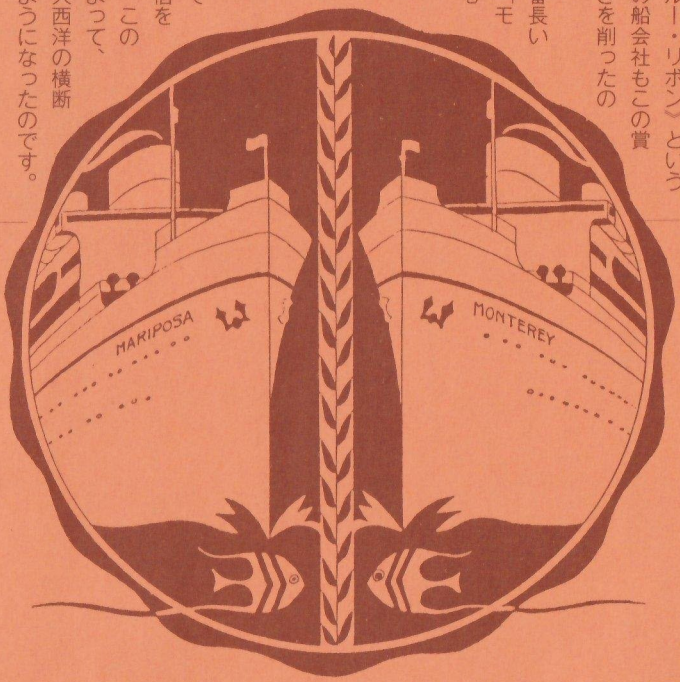
当時の日本の外国航路は、欧州航路、南米航路、北米航路の三系統に大別されますが、欧州航路では欧州クラシック様式に、南米航路は日本的な様式に統一されており、それぞれの航路の性質を見ることができます。桑港航路を含む北米航路は、ヨーロッパ・スタイルながらもモダンな傾向が見られ、もっとも華やかな航路であったといえるでしょう。

客船波に舞う

二十世紀の初め頃から、ヨーロッパとアメリカの間を航行する大西洋航路が盛んになりました。当時、もっとも短い時間で大西洋を横断した客船には《ブルー・リボン》という賞が与えられ、どの国の船会社もこの賞を獲得するためにしのぎを削ったのです。

ブルー・リボンの一番長い記録保持船は、英国船「モレタニア」で、一九〇七年に四日と二十二時間余りで大西洋を横断、その後も次々と記録を更新、約二十年間破られることはありませんでした。

豪華客船のスピードは、必要性からばかりでなく、船を持つ国の威信を示すものでした。また、このブルー・リボン競争によって、航海の歴史で初めて、大西洋の横断が所定時刻で行われるようになったのです。



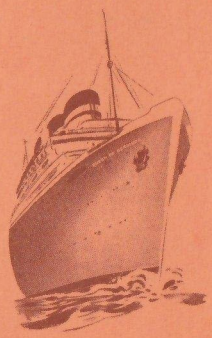
遭難信号SOS

ブルー・リボンにまつわる最大の悲劇といえば、英国タイタニック号の事件です。

一九一二年四月十四日、タイタニック号はその処女航海で、それまでの記録を破ろうと最大スピードで航行中、氷山に激突、沈没したのです。タイタニック号は遭難信号SOSを初めて送った客船としても有名ですが、その甲斐もむなしく、乗客・乗組員二千百三十六人のうち、千五百人の人々が救命ボート不足のために亡くなりました。

進水したばかりのこの豪華客船の海難事故は、世界中に一大センセーションを巻き起こしました。タイタニック号は、当時の英国通商委員会で定められた規定より多くの救命ボートを積んでおり、すべての面で安全だと思われていたのです。

おおぜいの人命をあずかる大型遠洋客船では、とくに厳しいルールが必要です。この事故を契機に、世界的に海上での安全を守る国際条約をつくろうという機運が盛り上がり、一九一四年にSOLAS（Safety of Life at Sea）という条約が締結され、もちろん日本もこの条約を結びました。



客船豆知識

船名のはなし

船の名前は、覚えやすく、読みやすく、聞きとりやすく、区別しやすいことを条件に命名されます。

「浅間丸」「氷川丸」「鎌倉丸」などの神社名、「あるぜんちな丸」「ぶらじる丸」など外国の地名をひらがなにしたものなど、船名は船会社によって付け方が決まっていて、船名をみればどこの会社の船か見当がつくようになっています。

また、姉妹船（同じ仕様の船）を何隻か造った場合は頭文字を統一したり、グレードの高さをイニシャルで表すこともあります。

「丸」の由来

船名には「翔洋丸」のように必ず「丸」がついています。「丸」は日本船のシンボルなのです。

「丸」がついた船は十二世紀後半からあって、その起源はハッキリしません。が、むかしから日本人は大事なものの名前に「丸」をつけていたようで、日吉丸、竹丸など男子の幼名、本丸、二の丸などの城郭名、武器名や楽器名などにその例がみられます。

ほかにも、むかし屋号を「丸」と呼んだためという問丸説、白章丸という人が天から降りてきて造船を教えたことからという白章丸説など、いろいろいわれていますが、いまだに定説はないようです。

船酔いの処方

海に嵐はつきもので、激しい波風があってこそ、初めて船の味もするというものです。

とはいえ、船酔いはやはり嫌なもの。船酔い対策には、むかしながらの民間療法や処方箋などいろいろありますが、一番良いのはベッドに背中をつけて上を向いて寝てしまうこと。また、甲板に出て、片足を一段高いハンドレールに掛け、その膝を波に合わせて曲げたり伸ばしたりしながら水平線に目をやります。つまり、船乗りさんお決まりのポーズと同じ格好ですが、これは三半規管を揺らさない船酔いの処方だったのです。

《資　料　提　供》

下記の関係者各位に資料提供いただきました。

三菱重工業株式会社長崎造船所史料館
日本郵船株式会社総務部広報課
株式会社港湾都市情報サービス

《参　考　文　献》

以下の諸文献を参考にさせていただきました。

「客船・昔と今」（出版協同社）
「豪華客船インテリア画集」（アテネ書房）
「全図解　豪華客船」（光文社）
「創業100年の長崎造船所」（三菱重工業株式会社）
「七つの海で一世紀」（日本郵船株式会社）
「バーテンダー今昔物語」（近代ジャーナル）
「郵船圖會」（東陽堂）

黄金の羅針盤
翔洋丸乗船御案内

株式会社リバーヒルソフト
福岡市中央区舞鶴一丁目一番十号 大神シルバービル七階
電話番号 〇九二(七七)三三一七

© 1990 RIVERHILL SOFT

亞細亞汽船株式會社

AZIA KISEN KAISYA